宮ノ台式土器の研究（1）

弥生時代研究プロジェクトチーム

1．はじめに

これまでに弥生時代研究プロジェクトチームは、弥生時代の遺構、遺物について様々な集成と検討を行ってきたが、土器を対象とした検討は1995・1996年度に「弥生土器の容量」をテーマに取り上げたことがあるものの、土器そのものを型式学的に検討したものではなかった。

今回は、弥生時代中期後葉の土器として位置付けられている「宮ノ台式土器」を取り上げ、いくつかの検討を試みることとした。「宮ノ台式土器」を取り扱うには、広範な地域を対象としなければ解決しない課題が多いのであるが、神奈川県内の「宮ノ台式土器」を対象とするとしても、全体の研究動向に立脚した上で検討を加えるべきであることは言を待たない。

よって今年度の作業としては、個別検討の前提作業として宮ノ台式土器研究のこれまでの流れについて概要をまとめ、現状と課題を整理しておくことにした。

本号の内容構成は、1．はじめに、2．宮ノ台式土器研究の流れ、3．編年的研究の現状、4．宮ノ台式土器の地域色、5．宮ノ台式土器の器種組成、6．まとめ、の6節からなり、巻末に参考文献として研究史に関する文献一覧を掲載した。各章の文責はそれぞれの文末に記してある。なお、表1と研究史に関する文献一覧は伊丹が集成した。全体の編集は池田が行った。（池田　治）

2．宮ノ台式土器研究の流れ

緒言　当たり前のことだが、ある日突然宮ノ台式土器ができたのではない。それが一つの型式として設定され、共有されるにはそれなりの時間が必要であり、今でも時間と空間の両面で伸縮する可能性を残しているのである。その足取りを追う行為は研究史のほんの一部で、宮ノ台式土器は日本考古学の歩みの中でどのように位置付けられるか、今後どのように展開するかを視野に入れてはじめて研究史となるのである。

だが、宮ノ台式については大きな問題が横たわる。これは「型式名」というよりむしろ南関東中期の「後葉」を示す「相」とか「段階」とかに相当するものであるということだ。こう考えざるをえない遠因は、研究史で必ず触れられるように、型式命名者による幾たびかの内容に求めることができる。また必ずしも型式学的研究法によって提示された「型式」ではないことでもある。なお、様式論といわれるものも型式学的研究法の一種であり、宮ノ台式が様式論の中から提示されたものでもないことは犬木努が指摘したとおりである。つまり宮ノ台式土器の全容について定義されたことがないことによる。時間的にも空間的にもどこからとこまで分布範囲をもつか突き詰められてはいないと言っても過言でない状況を認識するべきである。紙幅の関係でここでは一歩引いた、遠くから眺めた研究の流れを綴りたい。

研究史の研究史　宮ノ台式土器（須和田式・小田原式についても）を扱う論攷ではこの土器の命名者・杉原荘介の設定内容の三転や、神奈川県については神澤勇一との齟齬について触れられてきた。敢えてここでそれを繰り返すこともなく、その触れ方は執筆者と宮ノ台式土器との間合いによって異なるということの指摘に留めたい。宮ノ台遺跡の報告がされてから60年になろうとしている。つまりほとんどの研究者にとって何

らかの「宮ノ台式」ははじめから存在していたことは確かである。

宮ノ台式土器の研究史はとりもなおさず宮ノ台式土器の認識過程を追うことである。戦前の研究としては「弥生土器の枠組みはどのように形成されたのか」が問題となる。それを三つに分けてみたい。その１は認識の取っ掛かりについてである。石器時代の土器としての弥生土器１号が端緒となり、射程はここまで及ぼすべきである。なぜならこれが呼び水となり各地の「弥生土器」報告が相次ぐからである。ここには今日古式土師器と認識されるものも多く含んでおり、弥生土器下限の一時的範囲拡大を招いた。ただし最古の弥生土器を探るという認識は未だ発生していないためその上限は不明確であり、今日弥生時代前期から中期中頃と認識されている土器（特に東日本）は縄紋土器と考えられ易かった。その２は大きな枠組みの形成である。山内清男らによる縄紋土器型式の設定に摺り合わせるかのように、森本六爾や小林行雄は「前・中・後期」を設定する。その３はこれを受け「中期」ということが着目されてくることである。信州栗林式の認識が宮ノ台式設定の重要な触媒になったのではなかろうか。この時期、宮ノ台式設定に直接関わる資料の蓄積がある程度進んでいたからでもある。すなわち武蔵大倉山太尾・三宅島ツル根岬（坪田ココマノコシ）・上総宮ノ台・相模小田原・駿河矢崎などの諸遺跡からもたらされた知見である。

戦後の研究は「中期・関東」という確からしく思われた枠のもと、宮ノ台式へ収斂してゆく。括りとしては杉原荘介の伊勢湾玉突き論・縄目文土器論があり、佐原眞による施紋による大別を掲げるべきであろう。また細分としては、関東最大の遺跡と目されたこともある折本西原の威力を遺憾なく発揮させた石井寛・松本完・安藤広道の仕事があり、宮ノ台式最古の環濠集落として相模に君臨する砂田台の成果を元にした宍戸信悟の作業があり、東京湾の周辺だけでなく駿河を巻き込んだ黒沢浩・小倉淳一・伊藤淳史等の論攷が続出する昨今に至る（表１）。また前から後ろから、西から北から東から南からと連鎖反応的に諸課題が浮彫となってくる。すなわち有東・大里東・栗林・吉田・竜見町・受地だいやま・足洗式等との関係である。特に有東式・吉田式には注意が必要である。有東式とは終わり方が異なる。すなわち宮ノ台式の方が継続期間が長いことである。瀬名遺跡13a層を登呂式の魁けと捉えるか、有東式の残滓とするかで解釈も別れよう。また吉田式との親縁性と併行関係についてである。吉田遺跡という巨大集落の実像が明らかになるのと相俟って早晩解明がはかられることであろうが、精製土器の紋様帯だけの比較ならば斜行沈線で充填された鋸歯紋という要素は共通している。天竜川以東における中期（Ⅳ期）と後期（Ⅴ期）の境界について、広域編年の視角から再検討の動きが活発になるのは疑いない。

前後左右の問題とは次元を異にする様々な問題もある。絵画土器という視点からも宮ノ台式はクローズアップされてきたことも忘れてはならない。土器の容量や焼成方法といった面からも一部遡及されてきた。また、宮ノ台式土器を語るにはヒトの移動と定着や金属製品・石器の流通も頭の片隅においておかねばならない。そして精製土器の紋様帯だけが有効な型式設定の目安になる土器なのかという検討もはかられるべきである。

21世紀の宮ノ台式　今後の動きとしては宮ノ台式の発展と解消という問題がある。安藤広道が自ら念を押しているようにタイムスケールは型式の連続ではない。「宮ノ台式土器」を土器型式として設定するのか、脱宮ノ台式として細分可能な幾つかの型式に分解した後「宮ノ台式土器様式」を設定するのかである。後者は宮ノ台式土器という様式・型式の再編成であり、集団分析に耐えられる土器の括り方が創出できるのか、様式論を具体的分析方法に止揚できるのかという試練を経て宮ノ台式はどう分解されるかを問う作業となる。この「宮ノ台式土器様式」は「所謂須和田式」と呼ばれる代物とは異なったものになるであろう。すなわち

従来の記述（だけの）考古学から解釈（をする）考古学へと研究の比重を転換させてゆく中で、宮ノ台式土器という記述単位をどう昇華させるかが問われているのである。（伊丹　徹）

3．編年的研究の現状と課題

神奈川県域における宮ノ台式土器の細分　80年代において編年的研究の先駆けとなったのが、石井寛による横浜市折本西原遺跡における宮ノ台式土器の分析である。石井は同遺跡Ⅱ次調査出土資料の分析にあたり、以下の方法で宮ノ台式土器における段階的な変遷案を提示した（石井1980）。

①土器の文様要素から見た施文具・施文法の分類・検討を行う。②壺形土器を中心とした、文様の種類の分類と文様帯構成の傾向を確認。③遺構の重複から想定される遺構群の変遷と、①・②において確認した土器様相との比較を行う。④土器様相の時間的な変遷と、その編年的な位置付けをおこなう。

これにより石井は折本西原遺跡の出土土器にⅠ～Ⅲ段階の時間的な変遷が見られることを提示し、宮ノ台式土器全体では５段階程度（折本西原はこのうち３段階目以降）に区分できる可能性を示唆した。

また松本完は同じく折本西原遺跡Ⅰ次調査の資料について、各文様要素や器面調整等の細部から全体の文様帯構成にまで至る微細な観察と分析を行い、同様の手法で宮ノ台式土器における段階的な変遷の試案を示し、更には土器の諸属性に様々なレベルで地域的な系譜が見られることにまで言及した（松本1988）。

こうした両氏による検討の成果を継承するかたちで、90年代以降の編年的研究の方向性を決定付けることとなったのが、安藤広道による一連の論考である（安藤1990・1991・1996）。安藤は遺跡群研究を主題に、下末吉台地や相模湾沿岸地域を一つの小地域圏と仮定した上で（以下、Si地域・Sa地域と呼称）、それぞれの地域で時間的な変遷の指標となりうる一括資料を抽出し、大別Ⅰ～Ⅴ期、細別７段階に分類した。また宮ノ台式土器の研究そのものの問題点として「型式論的に前後関係の想定が容易で、なおかつ多くの一括資料に普遍的に存在するようなモチーフが存在しない」ことを挙げている。

またこれに続き、宍戸信悟は秦野市砂田台遺跡の住居址出土資料を中心に、相模地域における宮ノ台式土器を５段階に分類した（宍戸1992）。宍戸の論考では、土器の分析は壺・甕の様相の変化を対象とし、その他の形式（広口壺・高坏・椀・鉢類など）は基本的には検討から外している。安藤編年との明確な相違点は、次の二点である。①宮ノ台式土器の初現にあたる段階（宍戸Ⅰ期以前の段階）の土器群の位置付け。②壺の文様にみられる櫛描文主体の段階から縄文帯主体へと変化する時期の取り扱い。

ここでは安藤・宍戸両氏の分析を元に本県域における宮ノ台式土器の型式的変遷を略述し、現在迄の編年的研究の到達点として提示したい。なお、ここでは両氏の「期」と区別するために、便宜的に「段階」と表記することにする。

Ⅰ段階：宮ノ台式土器の成立段階（安藤SiⅠ・SaⅠ期）。壺には東海西部「白岩式古段階」の影響により櫛描文が定着する。甕も中期中葉の手法が残り、横位羽状の条痕・櫛描文が主体となる。

Ⅱ段階：壺は櫛描文を文様の主体とし、甕は横位羽状文が特徴的な段階（安藤SiⅡ・SaⅡ期、宍戸Ⅰ期）。壺の文様では櫛描文が圧倒的に増えるが、縄文・沈線の併用例や複合鋸歯文と格子目文の組合わせもみられる。

Ⅲ段階：壺の文様構成が多様化し、甕は横走羽状文の省略と刷毛目の盛行する段階（安藤SiⅢ・SaⅢ期、宍戸Ⅱ期）。在地的な様相が形成され、Sa地域とSi地域の間に明確な地域差が現れる。壺は文様帯の単純化が始まるがSa地域では２帯に分かれる傾向が認められる。甕の羽状文がSi地域では見

表１　神奈川県を中心とした宮ノ台式土器編年整合表

	石井			松本			安藤								宍戸			黒沢	
	1980			1988			1990		1991			1996			1992			1993	
1																			
2	Ⅰ		大里 子ノ神	Ⅰ		大里 坊田 （雨崎）	ＳｉⅠ	大里 坊田 南加瀬 三殿台	ＳｉⅠ	ＳａⅠ	子ノ神 12、68住	ＳｉⅠ	子ノ神 12、68住	雨崎				1	坊田 大里 小田原 山ノ神
3																砂田台		2	砂田台 （3溝下層、 2溝） 手広15住
4	Ⅱ	折本西原 2・3次	山ノ神	Ⅱ－1		手広15住 山ノ神 町畑	ＳｉⅡ	手広15住 山ノ神 椙山神社北 包含層 上倉田Ⅰ 6溝 三殿台	ＳｉⅡ	ＳａⅡ	手広15住 山ノ神 砂田台 15住 （3溝）	ＳｉⅡ	手広15住 山ノ神 砂田台 15住 （3溝）	＋	Ⅰ	3溝 20、101、 148住	手広15 山神下 3方 山ノ神 上倉田 6溝	3	砂田台 （3溝）
5																			
6	Ⅲ	環濠		Ⅱ－2	折本西原 Ⅰ	持田 池・溝 十二天	ＳｉⅢ 前半	折本西原 環濠 山王山 大塚 環濠 上倉田Ⅰ 1方	ＳｉⅢ	ＳａⅢ	持田 池・溝 伊勢山 南御門 1住	ＳｉⅢ 前半	持田 池・溝 伊勢山 南御門 1住	上ノ台				4	砂田台 10、57、 155住 13溝 西方Ａ
7				Ⅲ－1a	環濠														

8		7、23、42、49住（30、33、36、41、43住）		Ⅲ－1b	24、34住		SiⅢ後半	折本西原1方、23、36、42、49住				SiⅢ後半			Ⅱ	(2)·3·7·12·13·30溝14、26、104、114、167住	根丸島Ⅰ上山神1方大原Ⅲ SI03伊勢山上倉田1方		
9	Ⅳ	2、5、15、17、18住		Ⅲ－1c	1方、1溝、3住		SiⅣ	折本西原2、18住権田原SF18大棚杉山神社折本西原Ⅰ3住山王山2住床直	SiⅣ	SaⅣ	砂田台10住西方A1住、環濠	SiⅤ	砂田台10、22住西方A環濠	ひる畑3方	Ⅲ	1、10、17、22、36、46、57、63、73、107、108、138、140、155、166、168住6方、11溝	根丸島Ⅱ西方A1住、環濠	5	砂田台3、140、146住4・6方羽根尾20住
10				Ⅲ－2前	1、3、8、13、17、19、20、25住（22A、23、28、31住）														
11		8覆土28、40住（1、9、10、22、24、29、37住、方）		Ⅲ－2後	4、10A、14、15、26A、29A、33住（6B、7B、11B、21B、26B、29B住）		SiⅤ	境田3住折本西原4、48住観福寺北21住新羽大竹17住三殿台207、306C梶ヶ谷住	SiⅤ前半	SaⅤ	砂田台30住羽根尾20住戸ヶ崎2住	SiⅤ前半	砂田台30住羽根尾20住戸ヶ崎2住	佐原泉32B住	Ⅳ	3、4、8、30、35、46、51、74、125、135、137、146、158、160住	羽根尾20住戸ヶ崎2住		
12	Ⅴ	4、48住（34、35、45住、3方）		Ⅲ－3	5、6A、7A、21A、36、37住（11A、18住）				SiⅤ後半	SaⅥ	砂田台3、7、25住	SiⅤ後半	砂田台3、7、25住	佐原泉33B住	Ⅴ	5、7、25、31、33、58、68、89、139、154住		6	砂田台25、139、154住（36住）

られなくなるが、Sa地域ではまだ比較的多い。

Ⅳ段階：壺は帯縄文を多用し、甕は刷毛目が主体となる段階（安藤SiⅣ・SaⅣ期、宍戸Ⅲ期）。壺の文様帯の縮小化が進行するが、Sa地域では２帯構成が主体。この他の器種として広口壺・椀・鉢・高坏などが組成するようになる。

Ⅴ段階：壺の文様帯の減少が進み、文様の単純化・文様帯の縮小化が更に進行した段階（安藤SiⅤ・SaⅤ期、宍戸Ⅳ期）。壺は無区画の縄文帯が盛行し、無文部に赤彩を施すものが増加する。甕は刷毛目無文が主体。

Ⅵ段階：壺の文様が簡略化し、器形が定形化する段階（安藤SiⅤ期後半・SaⅥ期、宍戸Ⅴ期）。壺は頸部・胴部上半に縄文帯を施すだけのものと無文のものが主体となる。甕は刷毛目中心。この他、台付甕・椀・鉢・無頸壺・広口壺・高坏などがみられるが、安定した比率で出土する訳ではない。

大枠で捉えた場合、壺の文様要素に東海地方西部の櫛描文が導入され、甕は横羽状文のものを主体とする前半期（第Ⅰ～Ⅱ段階）と、壺は羽状縄文帯が盛行して文様帯の縮小化が進行し、甕は主として刷毛目調整だけの無文のものが組成する後半期（第Ⅳ～Ⅵ段階）に分かれる。ただし前半と後半の様相の転換期となる第Ⅲ段階については両氏の評価が若干異なる。またⅢ段階以降、各地に地域色が認められることが判明している。これは宮ノ台式土器の枠組みを考える上で、その初源と終末の問題に並ぶ重要な課題である。

研究上の課題　宮ノ台式土器は弥生時代中期後葉における南関東地方に分布する土器として広く知られている。隣接地域の土器型式である東関東の足洗式、北関東の御新田式（及び上山系列の後続型式群）、北西関東の竜見町式、そして東海地方東部に分布する有東式土器との並行関係（註１）については、これまで各地で検討を深め、それぞれの土器型式における空間的な分布と伴出状況とが検討されている。

そうした中で周辺地域の状況と比較した場合、宮ノ台式土器の編年研究における問題点として、安藤・宍戸両氏の論考以降、その研究成果を検証し、研究上の議論を活発化しようとする試みが殆ど見られないという事が指摘できる。現状では遺跡の発掘調査において宮ノ台式土器が出土した場合、安藤編年におけるｎ期・又は砂田台編年におけるｎ期に相当する資料である、というように時間的な指標としての段階設定に対して、出土した資料を安易に当てはめて解決を図る例がまま見られる。両氏の編年作業については、先述の通り土器様相の時間的変遷を示すものとして定着しているのであるが、設定された個々の段階の資料同士に時間的な隔絶や重複が全くないのかどうかという点については、型式編年を構成する各形式の組列を、出土状況の検討を通して遺跡ごとに確認することが今後も必要であろう。　（渡辺　外）

４．宮ノ台式土器の地域色

宮ノ台式土器の細分研究は編年に関する研究を中心に進められてきており、宮ノ台式土器の地域色を主題とした論考はこれまでにほとんど取り扱われたことがない。1981年に泉谷憲俊がそれまでの宮ノ台式土器の研究史を整理し（泉谷1981）、「宮ノ台式土器」とは一体何なのか、その範囲が明らかではないままであることを指摘した。これは「房総半島基部に標式を持つ宮ノ台式土器と相模湾西部に標式を持つ小田原式土器という南関東の東西両極地に標式を持つ土器型式名をもって南関東という広い地域を考えなければならない」といった無理があることから、「合理的な地域の設定を念頭において考えてゆくべき」と指摘しているのである。それまでの研究史上では、小田原式土器と宮ノ台式土器の齟齬が解消されないままであったことと、資料的制約があったことにより細分できなかったものと思われる。

1970年代以降の大規模開発に伴う発掘調査により、1980年代には南関東各地域でまとまった資料を扱うことができるようになり、遺跡ごと、地域ごとの細分研究が徐々に行われるようになる。細分研究は編年的研究が中心であるが、各論考の中で地域による様相の違いや特色について触れられているところがあるので、以下にその概要を列挙してみよう。

柿沼修平は千葉県佐倉市の大崎台遺跡の分析を通じ、房総では横位羽状縄文の甕が宮ノ台式土器の終末まで残ることを指摘した（柿沼1984）。

安藤広道は1990年に、遺跡群研究のためのタイムスケールの整理としての論考（安藤1990）で、「長年に亘り宮ノ台式土器細分案の中心となってきた、甕形土器の体部文様及び器面調整に関しても、その過程に大きな地域差が存在していることが指摘されるようになり」、「宮ノ台式土器には大きな地域差が認められ、それが宮ノ台式土器の細分作業上の障害になってきたわけであるが、それらの地域差は、遺跡数が多く、資料的な蓄積の進んだ『核地域』とも言うべき地域間の比較において」初めて地域設定がなされると指摘している。安藤は翌年に相模地域の編年案を示し（安藤1991）、さらに1996年の論文で宮ノ台式土器の地域差について触れ（安藤1996）、地域差は調査事例が多く資料の蓄積が進んでいる地域間のみで認められるもので、各地域間の境界は不鮮明とならざるを得ないが、下末吉台地地域に対応するような宮ノ台式土器の地域差の単位となる地域として、相模湾沿岸地域・大宮台地地域・市原台地地域・印旛沼周辺地域の4地域が抽出可能と考え、この他に三浦半島地域や九十九里浜地域も変遷過程に独自性が認められるようである、と述べている。これらの地域間では、個々の地域の編年観を他の地域の編年に安直に適用すると多くの誤解を生むことになる、と注意を促している。詳細は検討中ということであるが、そのエッセンスは示されている。

犬木努は、壺形土器の文様施文帯の変遷を検討する中で宮ノ台式（新相）における地域色の顕在化について言及し（犬木1992）、相模湾周辺地域や東京湾西岸地域では結紐文帯をもつことが希であること、縄文帯に代えて結節文帯を施文する土器は両総地域に分布が濃厚で、東京湾西岸や相模湾周辺には希薄であること、特殊な羽状縄文や頸部突帯といった特徴を持つ壺形土器の分布はほぼ房総半島に限られ、東京湾西岸地域には分布が希薄であることを述べている。

安藤の1991年の論文（安藤1991）を受けて宍戸信悟は、砂田台遺跡の報告（宍戸1991）に続いて相模地域の宮ノ台式土器及び宮ノ台期集落の分析を行い（宍戸1992）、東京湾岸地域と異なる点として、宮ノ台期の新しい段階にハケメ調整の甕に代わってナデ調整の甕が主流になることはないこと、壺の文様で波状もしくは山形に施された縄文帯が認められないこと、を挙げている。

小倉淳一は、東京湾東岸地域の宮ノ台式土器の細分を検討し（小倉1996）、その中で東京湾西岸地域は東岸地域に比べて櫛描文の文様率がかなり高そうであることと回転結節文を施文する壺形土器がほとんど見られないことを指摘した。また東京湾東岸地域では柿沼（柿沼1984）の指摘通り甕形土器における横走羽状文が宮ノ台式期の終末まで残ることを確認している。

黒沢浩は、房総の宮ノ台式土器を分析し（1997）、大崎台遺跡では宮ノ台式の新しい段階に縄文施文が発達するにも関わらず結紐文が極めて少なくなって行くことを認め、対して小櫃川流域から村田川流域の範囲では結紐文が山形文化して「久ヶ原式」へ移行してゆくことを読みとっている。

上記のように1990年代には宮ノ台式土器の細分研究が活発に行われ、地域的様相が検討されるとともに地域差も明らかにされるようになってきた。安藤が述べるように（安藤1996）、地域差というものは各地域の様相が明らかにされて初めて認識できるものであるので、宮ノ台式土器の細分研究が遺跡ごと、地域ごとの

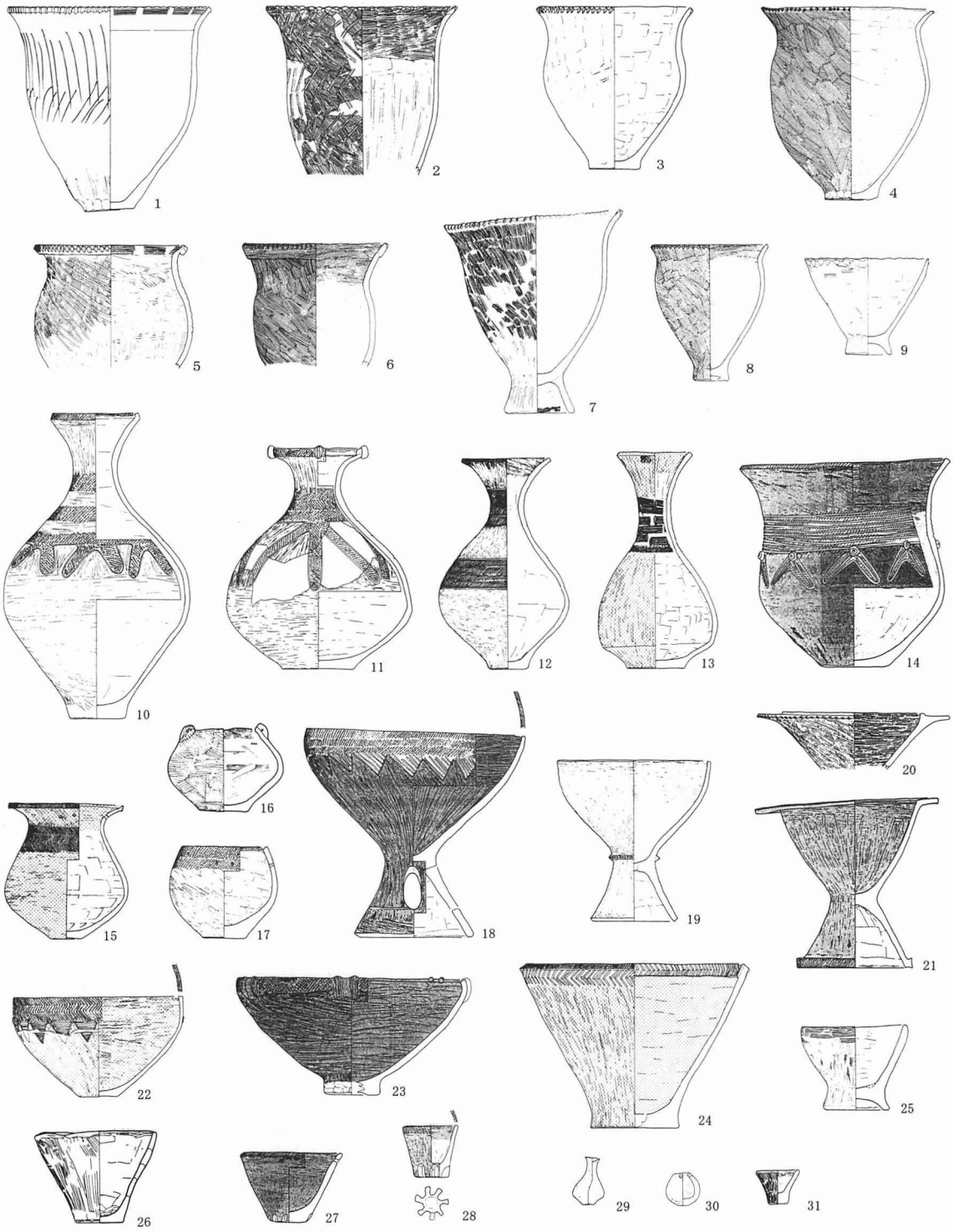
編年的研究中心で進められてきていることは、当然の成り行きと言えよう。しかしながら、編年的研究が主要器種である壺もしくは甕を対象として行われていることと相俟って、地域色が指摘されている点も壺の文様および甕の文様・調整についてのみである。宮ノ台式土器の地域色研究の課題としては、壺、甕以外の器種の消長や器種組成についての研究も、今後必要な視点であろう。（池田　治）

５．宮ノ台式土器の器種構成

1935年、杉原荘介は『上総宮ノ台遺跡調査概報』のなかで、出土土器を第一類～第三類に分類し、第一類を「器形は鉢形或いは甕形に近い鉢形である」とし、第二類を「器形は壺形、有頸壺形である」と分類した。第三類は古墳時代後期の土器であるので触れないが、後に宮ノ台式と呼ばれるこの形式を、第一類＝鉢（甕）：煮沸形態、第二類＝壺：貯蔵形態の二器種に大別した（杉原1935）。その翌年には『相模小田原出土の彌生式土器に就いて』の中で、出土土器を器種・施文により十一類に分類した。この中で椀形・高坏と、壺の細分としての細頸壺・広口壺・細口壺・細口有頸壺・広口有頸壺などの呼称を用いた（杉原1936）。

現在では、甕形土器（以下、甕）、いわゆる長頸壺形の形態を持つ壺形土器（同、壺）、高坏形土器（同、高坏）、鉢形土器（同、鉢）、椀形土器（同、椀）という用語をもって主要な構成器種として認識されており、甕形土器の細分として台付甕形土器、壺形土器の細分として、壺と甕の中間的器形を持つ広口壺形土器（以下、広口壺）、無頸壺形土器がある。また数量的に少ないが蓋と非実用器種としてのミニチュア（小形土器）が存在する（第１図）。甕や壺には、様々な法量のものが存在するため、小型または大型のものを特に小（大）型甕・小（大）型壺などと称する場合があるが、どの程度の大きさをもって小（大）型とするのか、また器種として分化させるべき機能面での差異が存在するのかなど、研究者間で特に共通の基準が存在していない。遺跡単位での感覚的な大小で分類するのではなく、地域毎または宮ノ台式分布圏全体での法量の統計的な分析を行った上で検討することが必要であろう（註２）。器形が類似する器種である鉢・椀の区別もまた研究者間で認識の差が存在するところとなるが、この２器種について、松本完は、壺形土器、甕形土器の製作工程の一部を省略若しくは中断することで産み出されたものとし、「壺形土器の胴部中位以下を独立させたような形態」のものを椀、小形の甕型土器と形態的に未分化とした上で甕形土器と器面調整を同じくし、器形的に甕形土器とするに難があるものを鉢とした（松本1988）。このような製作工程からの分類も一つの方法として有効と思われるが、実際には形態的特徴や法量を含めて分類を検討することが必要である。

次に、これらの器種がどのような組成を示すのかについて、県内で報告されている例を見てみる。横浜市折本西原遺跡の第１次調査（松本1988）では、重複関係等から集落の時間的推移を検討し、各時期に所属する８軒の竪穴住居址出土土器の器種構成を、破片数を基にグラフ・表で示している。ここでは器種構成の時間的変遷についてあえて触れないが、示された８軒の竪穴住居址から出土した土器全体を、同定不能破片を除いた器種ごとの割合で見ると、甕69.6％、壺23％、高坏・鉢・椀7.1％、ミニチュア0.3％という結果が出ている。甕が群を抜いて多く、ついで壺が多い。高坏をはじめとする小型器種は組成の主要な位置を占めないことがわかる。また、逗子市池子遺跡群№１－Ａ地点（谷口1999）では、自然流路である旧河道出土土器中の実測個体について器種構成を示している。破片資料を含めた1922個体の内訳は、甕721（37.5％）、壺930（48.4％）、広口壺77（4.0％）、鉢139（7.2％）、高坏47（2.4％）、蓋2（0.1％）、ミニチュア６（0.3％）となっている。やはり甕・壺が主体となっており、壺は広口壺を含めると全体の50％以上を占める。甕と壺が全体に占める割合は、折本西原遺跡で約93％、池子遺跡群№１－Ａ地点で約90％（広口壺含む）であり、ともに



1～6甕　7～9台付甕　10～13壺　14・15広口壺　16・17無頸壺　18～21高坏　22～28椀・鉢類
29～31ミニチュア

1手広八反目　2・4・6・8・10～12・14・18～21・23・27・28・31池子遺跡群No.1－A地点　3・5・9・13・15・17・22・24・29砂田台
16折本西原Ⅰ　25・30折本西原　26大塚

第1図　宮ノ台式土器にみられる器種・器形（S＝1／8）

９割以上を占めている。この数値を見ると、杉原荘介が当初鉢形（甕）・壺形に分類したように、宮ノ台式土器は甕・壺により構成されると言っても過言ではない。このような組成のあり方は県内の他遺跡においてもおそらく大差ないものと推測される。

遺跡単位または住居単位での器種組成のあり方について情報を提示もしくは検討を加えている報告書は現在のところ皆無に等しい。これは前述のように宮ノ台式期の器種組成が甕・壺主体であることが明瞭であり、編年研究のため文様構成・調整技法等による分類に主眼が置かれてきたことが要因であろう。また、破片資料の場合、器種の同定が困難なものが多く存在することも一つの要因となっている。器種組成についての情報を提示する場合、重量で示すのか破片数で示すのかが問題となる。いずれの場合も実際の個体数を正確に反映するものではないが、最低限重量で示すか、破片数・重量両方を提示することが望ましい。これを完形資料をもとに統計的に割り出した各器種の標準的な重量で割り返せば、ある程度の個体数把握が可能かもしれない。器種組成は型式・様式を説明する上で基礎的な情報の一つであるが、現状では宮ノ台式土器の器種組成について言及している報告書は少ない。時期や地域毎に器種組成の差異を比較検討する作業も、今後必要であろう。また、器種分類にあたって、器種を示す用語の定義がけっして一様ではないという現状がある。同一用語でも研究者によってその定義が異なっていることもあり、特に椀・鉢類について顕著である。宮ノ台式土器の器種を検討するにあたっては器種の分類基準を明示することが重要であるが、同時に用語の整理も必要であろう。（新開基史）

６．まとめ

宮ノ台式土器研究史について、研究の全体的な流れと個別テーマの現状に分けて述べてきた。ここでまとめとして、研究上の問題点・課題のいくつかを抽出しておくこととしたい。

「宮ノ台式土器」という用語が抱える最大の問題点は、宮ノ台式土器の定義が曖昧なまま定着してしまっていることであろう。この点はこれまでに幾度も指摘されてきていることである。２節で述べているように「宮ノ台式土器」の内容を再定義するには、一旦分解したうえで再編成する、という作業を経る必要がある。

宮ノ台式の内容に関わる具体的な課題として、壺・甕以外の器種の消長と各器種の型式組列の検証が行われていないという点が挙げられる。器種組成は型式や様式を説明する上で重要な要素の一つであるので、器種の消長と型式変遷を明らかにする必要がある。さらに型式の組成については、出土状況の検討によって同時性を確認するという作業を積み重ねてゆくべきであろう。

「地域差」の具体的内容については、壺・甕を含めた各器種についてこのような作業を「核地域」ごとに行った上で明示できるものであろう。「地域差」が存在する段階の「宮ノ台式土器」が、地域ごとの別型式として分かれるものなのか、それとも一つの土器型式から逸脱しない範囲の「地域色」に収まる違いなのか、ということが明らかにできるのは、このような作業過程を経ての結果と考える。

上記のような「宮ノ台式土器」の抱える問題点を全て解消することは一朝一夕に出来ることではないが、少なくとも神奈川県内の「宮ノ台式土器」をベースとして、現状の研究動向に立脚して基礎的な検討を試みてみようと思う。次回から具体的な課題検討を行っていきたい。

なお、県内の宮ノ台式土器出土遺跡分布図および遺跡文献一覧表は、紙幅の関係で次号に掲載することとする。作成にあたってご教示いただいた方々にご寛恕をお願いする次第である。（池田　治）

註

1　大井川以東の東海地方東部に分布する有東式土器については、その型式内容を宮ノ台式土器と同一のものとして捉える立場の研究がある（石川1992ほか・近藤2000）。

2　現状で宮ノ台式土器に地域色が存在すると指摘されているのであるから、統計的分析を行う単位は地域毎の方がより具体性を持つことになろう。

参考文献

文献１　論文（末尾の＊印は神奈川県内資料を主に扱ったものを表す）

相京邦彦　1982「房総半島における弥生時代中期の一様相」『白山史学』20

赤星直忠　1930「三浦半島に於ける弥生式遺蹟の分布」『考古学』１－５・６＊

赤星直忠　1955「南関東」『日本考古学講座４弥生文化』

秋本真澄　1972「沼津市興国寺城出土の弥生式土器」『駿豆考古』１２

秋本真澄　1976「田方郡函南町仁田仲道遺跡発掘調査報告」『駿豆の遺跡研究』（２）

安藤広道　1990「神奈川県下末吉台地における宮ノ台式土器の細分（上）・（下）」『古代文化』42－６・７＊

安藤広道　1991「相模湾沿岸地域における宮ノ台式土器の細分」『唐古』＊

安藤広道　1991「弥生時代集落群の動態」『横浜市埋蔵文化財センター調査研究集録』８

安藤広道　1992「三殿台遺跡の再検討」『横浜市ふるさと歴史財団調査研究集録』９

安藤広道　1996「南関東地方（中期後半・後期）」『ＹＡＹ！』

安藤広道　1996「南関東地方における『台付甕形土器』の展開」『鍋と甕　そのデザイン』

安藤広道　1998「相模川流域における宮ノ台式期の集落」『考古論叢神奈河』７

安藤広道　1999「弥生土器の『絵画』と文様」『古代』106

飯塚博和　1993「小田原式土器再考」『異貌』13

飯塚博和　1993「小田原式土器再考（続）」『異貌』14

飯塚美保　1996「宮ノ台式土器における台付甕形土器の成立」『神奈川考古』32

飯塚美保　1999「宮ノ台式土器における台付甕形土器の成立Ⅱ」『西相模考古』８

石川日出志　1986「中部・関東の弥生時代中期をめぐる諸問題」『第７回 三県シンポジウム　東日本における中期後半の弥生土器』

石川日出志　1996「関東地方の弥生土器」「小田原式土器」「宮ノ台式土器」『日本土器事典』雄山閣

石川日出志　1996「東日本弥生時代中期広域編年の概略」『ＹＡＹ！』

石川日出志　1997「御新田式土器をめぐって」『弥生土器シンポジウム　南関東の弥生土器』

石川日出志　1998「弥生時代中期関東の４地域の併存」『駿台史学』102

石川日出志　2001「関東地方弥生時代中期中葉の社会変動」『駿台史学』113

石川日出志　2001「弥生時代論」『銅鐸から描く弥生社会』一宮市博物館

石野　瑛　1930「神奈川県内の顕著なる弥生式遺蹟と遺物」『考古学』１－５・６＊

泉谷憲俊　1981「研究史宮ノ台式土器」『法政考古学』６

泉谷憲俊　1982「宮ノ台式土器の時間軸上の細分試案」『法政考古学』７

泉谷憲俊　1983「宮ノ台式に見られる楕円文をめぐって」『法政考古学』８

伊丹　徹　1993「相模ホエールズの誕生」『西相模考古』２＊

伊丹　徹　1994「宮ノ台式土器研究前史」『西相模考古』３

市川規平　1984「絵が描かれた弥生式土器」『湘南考古学同好会々報』18＊

市川規平　2001「嘘の様な本当の話」『湘南考古学同好会々報』85＊

伊藤淳史　1996「大平洋沿岸における弥生文化の展開」『ＹＡＹ！』

伊藤淳史　1997「大平洋沿岸における弥生文化の展開・補遺」『西相模考古』６

伊藤　郭・坂本　彰　1979「境田遺跡の調査」『港北ニュータウン埋蔵文化財調査団　調査研究集録』４＊

犬木　努　1992「宮ノ台式土器基礎考」『東京大学文学部考古学研究室紀要』11

宇野信四郎　1967「東京都北区飛鳥山遺跡の調査報告」『古代』49・50

江坂輝弥　1988「南加瀬貝塚」『川崎市史 資料編１考古 文献 美術工芸』＊
江藤千萬樹　1935「駿河国沼津を中心とする弥生式異形石器に就いて」『上代文化』13
江藤千萬樹　1936「静岡県東部地方に於ける弥生式文化」『上代文化』14
江藤千萬樹　1937「駿河矢崎の弥生式遺跡調査略報」『考古学』８－６
江藤千萬樹　1937「弥生式末期に於ける原始漁撈聚落」『上代文化』15
江藤千萬樹　1937「沼津駿東郡地方に於ける弥生式文化様相」『静岡県郷土研究』９
江藤千萬樹　1938「矢崎遺蹟予察」『上代文化』16
江藤千萬樹　1938「武蔵大倉山太尾の弥生式土器の考察」『考古学』９－10＊
大沢　孝　1989「大崎台タイプの土器について」『千葉県立房総風土記の丘年報』12
大島慎一　1983「南関東地方の弥生中期編年研究について」『東海史学』18
大島慎一　1986「神奈川県における中期後半の弥生土器について」『第７回 三県シンポジウム　東日本における中期後半の弥生土器』＊
大島慎一　1997「小田原地方の弥生土器研究に関する覚書」『小田原市郷土文化館研究報告』33＊
大塚初重　1958「三宅島ボウタ遺跡の調査」『伊豆諸島文化財総合調査報告第１分冊』東京都文化財調査報告書６
大塚初重　1959「利島ケッケイ山遺跡の調査」『伊豆諸島文化財総合調査報告第２分冊』東京都文化財調査報告書７
大塚初重　1965「東京都三宅島ボウタ遺跡の調査」『考古学集刊』３－１
大塚初重　1968「東海地方Ⅱ」『弥生式土器集成　本編２』東京堂
岡本　勇　1967「三浦市赤坂遺跡の調査」『Mouseion ムゼイオン』13＊
岡本孝之　1974「東日本先史時代末期の評価」（１）～（５）『考古学ジャーナル』97～99・101・102
岡本孝之　1976「宮ノ台期弥生文化の意義」『神奈川考古』１
岡本孝之　1990「縄文土器の範囲」『古代文化』42－５
岡安雅彦　1999『弥生の技術革新』安城市歴史博物館
小倉淳一　1993「千葉県佐倉市大崎台遺跡の宮ノ台式土器について」『法政考古学』20
小倉淳一　1997「東京湾東岸地域の宮ノ台式土器」『史館』27
小高春雄・渡辺修一　1989『房総考古学ライブラリー４　弥生時代』千葉県文化財センター
小野真一　1958『駿河湾地方の弥生文化』
小野真一　1962「駿河・伊豆地域における弥生文化前半の様相」『弥生文化研究会研究発表要旨』
小野真一　1962「駿河矢崎遺跡第一次調査概報」『弥生文化研究会研究発表要旨』
小野真一　1962「北伊豆向原・館両遺跡出土の弥生土器」『弥生文化研究会研究発表要旨』
小野真一　1963「駿河矢崎遺跡調査略報」『沼津女子高校考古館報』３
小野真一　1963「静岡県の弥生文化」『静岡県の古代文化』静岡県文化財調査報告書２
小野真一　1964「駿河矢崎遺跡第３次調査略報」『沼津女子高校考古館報』４
小野真一　1966「駿河湾地方における中期弥生文化について」『上代文化』36
小野真一　1969「東海地方東半の弥生文化」（１）・（２）『信濃』21－４・５
小野真一　1976「弥生土器－東海東部」（１～３）『考古学ジャーナル』126・127・129
小野真一　1979「静岡県における弥生土器とその終末について」（１）・（２）『静岡県考古学研究』６・７
小野真一　1979『駿豆地方の弥生式土器集成』
小野真一・秋本真澄ほか　1972「北伊豆函南町向原遺跡発掘調査報告」『駿豆考古』13
及川良彦　1987「弥生土器の移動と地域性」『青山考古』５
柿沼幹夫　1992「弥生土器と地域性」『平成４年度埋蔵文化財担当者研修会資料』
柿沼修平　1974「佐倉市畔田川崎遺跡の弥生式土器」『史館』３
柿沼修平　1983「南関東弥生時代中期後半にみる土器紋様の覚書」『史館』15
柿沼修平　1984「大崎台遺跡出土の弥生式土器」『奈和』15周年記念論文集
柿沼修平　1991「大崎台遺跡の研究」Ⅰ『奈和』29
柿沼修平　1992「大崎台遺跡の研究」Ⅱ『奈和』30
柿沼修平　1993「大崎台遺跡の研究」Ⅲ『奈和』31
柿沼修平　1994「大崎台遺跡の研究」Ⅳ『奈和』32

柿沼修平　1995「大崎台遺跡の研究」Ⅴ『奈和』33
柿沼修平　1996「大崎台遺跡の研究」Ⅵ『奈和』34
柿沼修平　1999「大崎台遺跡の研究」Ⅶ『奈和』37
柿沼修平・青木幸一　1984「房総弥生式土器の研究　資料編」『日本考古学研究所集報』Ⅵ
柿沼修平・青木幸一　1985「房総弥生式土器の研究　研究編」『日本考古学研究所集報』Ⅶ
柿沼修平・田川　良　1998「千葉県佐倉市大崎台遺跡出土の土器」『奈和』36
加藤明秀・芹沢長介　1938「静岡市有東杉畷馬捨場遺跡」『考古学』９－９
神奈川県（赤星直忠・岡本　勇編）　1979『神奈川県史 資料編20　考古資料』＊
神澤勇一　1959「横浜市谷津田原出土の弥生式土器について」『貝塚』87＊
神澤勇一　1966「関東」『日本の考古学 Ⅲ 弥生時代』
神澤勇一　1968「相模湾沿岸地域における弥生式土器の様相について」『神奈川県立博物館研究報告』１－１＊
神澤勇一　1969『神奈川県考古資料集成 1 弥生式土器』＊
神澤勇一・川口徳治朗　1973『神奈川県考古資料集成 5 弥生式土器（２）』＊
熊野正也　1976「宮ノ台式土器に関する覚え書き」『房総の郷土史』４
熊野正也　1979「入門講座　弥生土器　南関東」１～３『考古学ジャーナル』135・138・139
熊野正也　1979「南関東における弥生文化の特徴」『どるめん』23
熊野正也　1989「宮ノ台遺跡」『探訪 弥生の遺跡 畿内東日本編』有斐閣
黒沢　浩　1987「神奈川県伊勢山遺跡出土の弥生式土器」『明治大学考古学博物館館報』３
黒沢　浩　1993「宮ノ台式土器の成立」『駿台史学』89
黒沢　浩　1997「房総宮ノ台式土器考」『史館』29
黒沢　浩　1997「『大里東式土器』をめぐって」『弥生土器シンポジウム　南関東の弥生土器』
黒沢　浩　1998「続・房総宮ノ台式土器考」『史館』30
群馬県考古学談話会ほか編　1986『第７回 三県シンポジウム　東日本における中期後半の弥生土器』
剱持和夫　1986「武蔵地方の概観」『第７回 三県シンポジウム　東日本における中期後半の弥生土器』
小林行雄　1932「弥生式土器聚成図　武蔵相模之部」『考古学』３－４＊
小林行雄　1938「弥生式文化」『日本文化史大系 第１巻 原始文化』誠文堂新光社
小林行雄　1939『弥生式土器聚成図録正編解説』東京考古学会学報１
近藤　舞　2000「駿豆地方の弥生時代中期後半の遺跡群」『静岡県考古学研究』32
斎木　勝　1978「東京湾東岸における弥生中期遺跡の集落構成と出土土器」『千葉県文化財センター研究紀要』３
斎木　勝　1986「千葉県における弥生時代中期後半の土器について」『第７回 三県シンポジウム　東日本における中期後半の弥生土器』
斎木　勝　1987「宮ノ台式土器」『弥生文化の研究 4 弥生土器Ⅱ』雄山閣
坂詰秀一　1959「小田原市町畑出土の弥生式土器に就いて」『上代文化』29＊
坂本　彰　1976「柚木台遺跡（リ12）の調査始まる」『港北のむかし』64＊
佐藤由紀男　1986「遠江の弥生時代中期後葉の土器」『第７回 三県シンポジウム　東日本における中期後半の弥生土器』
佐原　眞　1979「弥生土器編年表」『世界考古学事典』上　平凡社
宍戸信悟　1992「南関東における宮ノ台期弥生文化の発展」『神奈川考古』28＊
静岡県　1990『静岡県史　資料編１　考古１』
設楽博己　1991「関東地方の弥生土器」『邪馬台国時代の東日本』六興出版
篠原和大　2000「登呂式土器の再検討」『登呂式土器をみる会資料集』
杉原荘介　1932「下総東葛飾郡国分村須和田弥生式遺跡研究摘要」（上・下）『武蔵野』18－４・６
杉原荘介　1934「三宅島ツル根岬に於ける火山噴出物下の弥生式遺跡」『人類学雑誌』49－６
杉原荘介　1934「三宅島紀行」『武蔵野』21－３
杉原荘介　1934「三宅島ツル根岬に於ける火山噴出物下の弥生式遺跡」『人類学雑誌』49－６
杉原荘介　1935「上総宮ノ台遺跡調査概報」『考古学』６－７
杉原荘介　1936「相模小田原出土の弥生式土器に就いて」『人類学雑誌』51－１＊

杉原荘介　1936「相模小田原出土の弥生式土器に就いての補遺」『人類学雑誌』51－４＊
杉原荘介　1936「下野・野沢遺跡及び陸前・桝形囲貝塚出土の弥生式土器の位置に就いて」『考古学』７－８
杉原荘介　1939「南関東を中心とせる土師部祝部土器の諸問題」『考古学』10－４
杉原荘介　1940「武蔵弥生町出土の弥生式土器に就いて」『考古学』11－７
杉原荘介　1942「上総宮ノ台遺蹟調査概報－補遺－」『古代文化』13－７
杉原荘介　1951「静岡市有東第一遺跡」「静岡県安倍郡原添遺跡」『日本考古学年報』１
杉原荘介　1955「弥生文化」『日本考古学講座 4 弥生文化』雄山閣
杉原荘介　1956「弥生式土器」『図説 日本文化史大系 1 縄文・弥生・古墳時代』小学館
杉原荘介　1961「神奈川県藤沢市引地伊勢山遺跡の土器」『弥生式土器集成　資料編２』＊
杉原荘介　1964「縄目文土器」『日本原始美術 3 弥生式土器』講談社
杉原荘介　1967「下総須和田出土の弥生式土器について」『考古学集刊』３－３
杉原荘介　1968「会報」『考古学集刊』４－１
杉原荘介　1968「南関東地方」『弥生式土器集成　本編２』東京堂
杉原荘介・大塚初重　1971「原始農耕文化」『市川市史 1 原始・古代』
杉山博久　1969「小田原式土器について」『小田原考古学研究会会報』１＊
杉山博久　1970「中里遺跡出土土器と二・三の問題」『小田原地方史研究』２＊
鈴木宏子　1971「函南町向原出土の弥生式土器」『駿豆考古』11
鈴木正博　1999「『十王台式』研究法から観た南関東弥生式（序説）」『茨城県考古学会誌』11
鈴木正博　1999「栃木『先史土器』研究の課題３」『婆良岐考古』21
鈴木正博　2000「『宮ノ台式』成立基盤の再吟味」『日本考古学協会第66回総会　研究発表要旨』
鈴木正博　2001「『小田原式』研究序説」『茨城県考古学会誌』13
鈴木正博　2001「『王子台』の頃、そして『王子ノ台』から」『日本考古学協会第67回総会　研究発表要旨』
鈴木正博　2001「貝田町パクリ事件は迷宮入りか、それとも型式学の復権は可能か！」『関東弥生研究会第１回研究発表会資料』
芹沢長介　1958「三宅島坪田ココマノコシ遺跡」『伊豆諸島文化財総合調査報告　第一分冊』
曽根博明・比田井克仁　1988「根丸島遺跡」『西相模の土器』
曽野寿彦・中川成夫　1950「東京都三宅島の遺跡概報」『考古学雑誌』36－３
薗田芳雄　1969「関東」『新版考古学講座４原史文化（上）弥生文化』雄山閣
滝口　宏　1955「市川市須和田奈良時代遺跡」『古代』14・15
竹内直文　1988「東日本における弥生文化の発展」『史館』20
田中義昭　1976「南関東における農耕社会の成立をめぐる若干の問題」『考古学研究』22－３
寺田兼方　1959「藤沢市稲荷発見の弥生式土器」『湘南学園論叢』１＊
寺田兼方　1961「若尾山出土の遺物」『藤沢市の遺跡と遺物（二）』湘南学園歴史部＊
寺田兼方　1970「考古編　伊勢山遺跡」『藤沢市史 第１巻 資料編』＊
寺田兼方　1984「編集者付記」『湘南考古学同好会々報』18＊
東京都教育庁社会教育部文化課　1974『東京都遺跡地図』
中西道行　1982「静岡県有東遺跡出土の弥生中期の土器」『クロッカスCROCUS』６
中野国雄　1982「矢崎遺跡発掘調査略報」『静岡県考古学研究』13
中野　宥　1984「登呂遺跡第６次調査と周辺遺跡」『登呂 いま弥生文化を問いなおす』登呂遺跡発見40周年シンポジウム資料
中山　豊　1990「神奈川県相模川以西地域における流水紋について」『法政考古学』15＊
西川修一　1992「甕のような高坏」『考古論叢神奈河』１
橋口尚武　1975『三宅島の埋蔵文化財』
橋口尚武　1988『島の考古学』ＵＰ考古学選書３
橋本裕行　1988「東日本弥生土器絵画・記号総論」『橿原考古学研究所論集』８
浜田勘太・神澤勇一　1961「三浦市城ケ島出土の弥生式土器」『横須賀市博物館研究報告（人文科学）』５＊
浜田勘太・神澤勇一　1963「三浦市遊ケ崎遺跡調査概報」『横須賀市博物館研究報告（人文科学）』７＊

久永春男　1955「東海」『日本考古学講座 4 弥生文化』
久永春男　1969「東海地方」『新版考古学講座　4　原史文化（上)』
平野吾郎　1989「有東遺跡」『探訪 弥生の遺跡 畿内東日本編』有斐閣
深澤克友　1979「土器の伝播と接触交渉」『どるめん』 23
福田敏一　1979「中期弥生式土器小考」『法政考古学』 3
福田敏一　1981「南関東弥生土器にみられる二系統」『法政考古学』 6
古内　茂　1977「宮ノ台式土器の変遷について」『船橋考古』 7
古谷　清　1930「神奈川太尾大倉精神文化研究所敷地発見の石器土器」『史蹟名勝天然記念物』 5－5＊
星田享二　1976「東日本弥生時代初頭の土器と墓制」『史館』 7
星野達雄　1981「原史学方法論と南関東弥生式土器編年図式の成立過程」『法政史論』 8
馬目順一・原　信之　1963「神奈川県藤沢市発見の弥生式土器」『考古学雑誌』 48－4＊
三森俊彦　1977「市原市大厩遺跡の弥生文化」『ＭＵＳＥＵＭちば』 8
向坂鋼二　1966「新居町一里田遺跡調査概報」『静岡県埋蔵文化財要覧』 Ⅰ
向坂鋼二　1967「遠江地方を中心とした櫛描文と縄文の系譜」『信濃』 19－1
向坂鋼二　1984「静岡県下の弥生文化」『登呂 いま弥生文化を問いなおす』登呂遺跡発見40周年シンポジウム資料
向坂鋼二　1985「登呂の土器の特色と他地域との関連」『登呂遺跡と弥生文化』
向坂鋼二　1987「考古学的方法による静岡県の地域区分」『静岡県史研究』 3
向坂鋼二・永房　熙　1968「有東式土器」『遠江考古学研究』 2
望月幹夫　1975「Ⅳ．各地の調査結果　（1）Ａ地区　№1遺跡　2．弥生時代から古墳時代初頭の遺物」『厚木パークシティ開発地域内埋蔵文化財分布調査報告書』厚木パークシティ開発地域内埋蔵文化財発掘予備調査団＊
森本六爾　1934「下総須和田の土器について」『人類学雑誌』49－10
森本六爾・小林行雄　1938『弥生式土器聚成図録 正編』
山内清男　1940『日本先史土器図譜　第Ｖ輯　弥生式土器』［1967再刊］
弥生時代研究プロジェクトチーム　1996・97「弥生土器の容量について」1・2『かながわの考古学　研究紀要』1・2＊
八幡一郎　1930「武蔵国太尾発見の遺物」『考古学』 1－5・6＊
八幡一郎　1931「石器出土の弥生式遺跡調査録」『考古学』 2－3＊
八幡一郎　1934「下総国須和田の弥生式土器」『人類学雑誌』49－9
吉田富夫　1938「遠江国及び駿河国の弥生式文化」『考古学』 9－1

文献 2　神奈川県内の報告書掲載論攷

石井克巳　1974「伊勢原市白根遺跡出土の弥生式土器と石器」『愛名鳥山』愛名鳥山遺跡発掘調査会
石井　寛　1980「調査の成果と課題　弥生時代」『折本西原遺跡』横浜市埋蔵文化財調査委員会
岡本　勇　1975「成果と問題点　弥生集落と土器」『持田遺跡発掘調査報告』
宍戸信悟　1991「調査結果のまとめ　弥生時代中期後半の遺構と遺物」『砂田台遺跡Ⅱ』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告20
杉山博久　1970「山ノ神遺跡周辺の弥生中期の遺跡とその出土資料」『小田原市文化財調査報告書』 3
谷口　肇　1999「№1－Ａ地点の出土遺物について」『池子遺跡群Ｘ』かながわ考古学財団調査報告46
松本　完　1988「折本西原遺跡の弥生集落」『折本西原遺跡－Ⅰ』折本西原遺跡調査団

文献 3　神奈川県外の基準資料報告書および報告書掲載論攷抄

《千葉》

新井和之ほか　1982「相ノ谷遺跡」『北総線』
稲葉昭智　1994「尾畑台遺跡」『大竹遺跡群発掘調査報告書Ⅲ』君津郡市文化財センター発掘調査報告書91
大崎紀子　1992『小谷遺跡発掘調査報告書』君津郡市文化財センター発掘調査報告書72
大澤　孝　1991『六崎貴舟台遺跡発掘調査報告書』印旛郡市文化財センター発掘調査報告書28
大渕淳史・小川博和　1994『安房仮家塚』
大村　直　1992『市原市叶台遺跡』市原市文化財センター調査報告書44

乙益重隆編　1980『上総菅生遺跡』中央公論美術出版
甲斐博幸ほか　1996『常代』君津郡市文化財センター発掘調査報告書112
柿沼修平　1973「星久喜遺跡」『京葉』
菊池真太郎ほか　1979『千葉市城の腰遺跡』
倉田芳郎編　1978「千葉・南総中学遺跡」『先史』10
小高春雄ほか　1983『道庭遺跡』
小高春雄ほか　1993『滝ノ口向台遺跡・大作古墳群』千葉県文化財センター調査報告書232
斎木　勝ほか　1974『市原市菊間遺跡』
佐伯秀人　1992『前三舟台遺跡』君津郡市文化財センター発掘調査報告書82
実川　理・浜崎雅仁　1992『美生Ⅰ』君津郡市文化財センター発掘調査報告書71
末武直則　1988『押畑子の神城跡発掘調査報告書』印旛郡市文化財センター発掘調査報告書24
田中清美・鈴木英啓　1981『唐崎台』
浜崎雅仁　1996『高砂遺跡』君津郡市文化財センター発掘調査報告書113
三森俊彦ほか　1973「大森第２遺跡」『京葉』
三森俊彦ほか　1974『市原市大厩遺跡』
矢戸三男ほか　1975『阿玉台北遺跡』
《東京》
菊池義次ほか　1955『道灌山遺跡』荒川区役所
小林青樹ほか　1995『大里東遺跡発掘調査報告書』
鈴木直人ほか　1996『飛鳥山遺跡』東京都北区教育委員会
高山　優・泉美香子　1981「土器　弥生時代」『伊皿子貝塚遺跡』
《埼玉》
劔持和夫ほか　1984『明花向・明花上ノ台・井沼方馬堤・とうのこし』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書35
鈴木孝之ほか　1991『代正寺・大西』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書110
瀧瀬芳之ほか　1993『上敷免遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書128
谷井　彪ほか　1975『台の城山遺跡』朝霞市教育委員会
中島　宏ほか　1984『池守・池上』埼玉県教育委員会
増田逸朗ほか　1972「馬込・平林寺遺跡発掘調査報告」『加倉　西原　馬込　平林寺』埼玉県遺跡調査会報告14
柳田敏司ほか　1982『埼玉県史　資料編２』
吉川國男ほか　1976『埼玉県土器集成４　縄文晩期末葉～弥生中期』埼玉考古学会
吉田　稔ほか　1991『小敷田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書95
《静岡》
芦川忠利ほか　1999『長伏六反田遺跡』
内藤　晃・市原寿文編　1972『浜名郡新居町一里田遺跡調査概報』新居町教育委員会
中野國雄　1986『矢崎遺跡第１次発掘調査出土土器図版集解説』清水町教育委員会
中野國男・秋本真澄　1998『清水町史　資料編Ⅱ　考古』
中山正典・中金本賢治　1994『瀬名遺跡Ⅲ』静岡県埋蔵文化財調査研究所
平野吾郎ほか　1983『有東遺跡』静岡県教育委員会
《その他》
細谷正策・尾花源司　1987『御新田遺跡・富士前遺跡・ヤッチャラ遺跡・下り遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告85